



三崎亜記「私」小考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 比呂己 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008781

三崎亜記「私」小考

佐野 比呂己

はじめに

平成二十八年(二〇一六)四月より、中学校検定教科書がリニューアルされ、少ないながら各社とも新教材が所収されている。

ここで、取り上げる三崎亜記「私」は、教育出版中学校検定教科書第三学年用に所収された教材である。

三崎亜記について、森田悦子は次のように記す²。

作家

1970年—

福岡県生まれ。熊本大学文学部史学科を卒業し、福岡県内で自治体職員として勤務する。

2004年、本業のかたわら初めて書き上げた小説『となり町戦争』が第17回すばる新人賞を受賞した。地域活性化のための公共事業として始まったとなり町との戦争に主人公が巻き込まれていく斬新な設定の作品で、地方行政が淡々と戦争を遂

行していく様子を現役公務員の視点で描き、戦争に対する単純な価値観を痛烈に批判した。05年1月には集英社から単行本化され、15万部を超えるベストセラーとなった。さらに同年受賞は逃したものの、第18回三島由紀夫賞と第133回直木賞にノミネートされた。

この作品を契機に作家業に専念し、『小説すばる』や『新潮』、『群像』などの文芸誌に小説やエッセーを発表する。同年11月には短編集『バスジャック』(集英社)を出版。バスジャックがブームとなり、人々がこの新しいスリルを求めて高速バスに殺到するという設定の表題作をはじめ、全7編を収録。その奇想天外な状況設定とテンポのよい筆致で注目を集めている。福岡県在住。

「私」の初出は、『小説すばる』(集英社 平成二十三年(二〇一〇)十二月)である。十二月号恒例の「小説すばる新人賞受賞作家特集」の一作品として掲載されている。

その後、日本文藝家協会編集の『短篇ベストコレクション 現代の小説2012』(徳間書店 平成二十四年(二〇一二)六月)に所収

される。同書は平成二十三年(二〇一一)に発表された多くの短編小説の中から選び出されたアンソロジーである。編集は川村湊、清原康正、長谷部史親、森下一仁があたっている。

梗概構成

『小説すばる』には、本文の直前に次のリード文が記されている。

「私宛ではない督促状が届いた、役所に女性が言ってきた。免許証を見せてもらっても、どこにも間違いないように見えるのだが――。

また、『短篇ベストコレクション 現代の小説2012』の「解説」の項に清原康正が作品内容について次のように記している。

主人公の「私」は「模範」とされる市民対応¹で五年連続で庁内表彰されている公務員。若い女性が督促状に対する問い合わせに来る。が届いた、役所に女性が言ってきた。情報管理課の住民番号のデータが間違つて二重登録されたものと分かり、臨機応変に対応し、納得して帰ってもらう。退庁後に立ち寄った図書館で、女性司書が主人公の貸出データが二重になっていると言う。確認がとれて二重状態が解消される。住民情報データと個人とが密接に結びついている近未来社会が背景なのだが、役所のすべてのデータが無くなつてしまったら個人の存在そのものも消えてしまうという、近い将来に起こり得ることへの恐怖がこみ上げてくる。

そして、『伝え合う言葉 中学国語3 教師用指導書 教材研究編 上』(教育出版 平成二十八年(二〇一六)(以下、『教師用指導書』と略す)の「主題・要旨」の項には次のような記述が見られる。

私は「模範」とされる市民対応²で五年連続で表彰されている公務員である。督促状を持った女性が現れ、住所も名前も間違っていないが自分宛の督促状ではないと主張する。私は当惑するが冷静に対応し、女性のデータは、間違つて二重登録されたデータの一方が手作業で消去されていたことが判明する。それを女性に伝えると、女性は消されたほうのデータが自分のものなので、そちらを復元してほしいと要求する。データを復元し、私が印刷し直した督促状を女性に手渡すと、女性は安堵し、古いほうの督促状はシュレッダーにかけるよう要求する。私は女性が去ったあと、女性への対応は「模範的な市民対応」であつたと振り返るとともに、住民情報データと個人の密接な結びつきについて思いをほせる。

業務を終えた私が図書館に行き、本を五冊借りようとする時、司書はすでに六冊借りているので四冊しか借りられないと言われる。貸出データでは、私が一週間前に三冊、一昨日に三冊借りていることになっている。私は貸出データが二重になっていると指摘し、正すよう要求するが、司書はあなた自身が二重になっていると言う。私は、ミスで情報も二重になることがあるのだから、自分の存在が二重になることもあると考えるが、それは私自身が与り知らぬ私であるので私ではない、私には五冊本を借りる権利があると主張する。しばらくして司書に、二重状態が解消されることを告げられ、私は満足する。そし

て、どちらの貸出データが削除されようが何の問題もないと考える。

「私」は「◇」によって、二つの部分に分かれている。主人公が「若い女性」と対応する前半場面をエピソードⅠ、主人公が「女性司書」と接触する場面をエピソードⅡとし、以下、考察・検討を加えることとする。

かぎ付きの言葉の意味

三崎の作品には、かぎの使用が多いという特徴が見られる。

「私」も他作品と同様に「かぎ付き言葉」が多用されている。『教師用指導書』の「表現」の項目には、「かぎ付き言葉の意味」についての記述がある。

これらの効果は、まず強調である。かぎをつけることで、これらの言葉は固定的限定的な意味合いで用いられていることがわかる。例えば、類型化された言葉(意味することが限定的な言葉)であることが表現されたり、感情のこもらない言葉(事務的な言葉)であることがほめかされたりしている。

本文を参照しつつ、検討を加えていく。

役所の仕事とは、「効率」や「合理性」は最優先されない。市民に「納得いただく」ために、無意味でもやらなければいけない業務というものは日常的に発生する。(二九⑭—⑮)

この部分は役所の仕事の優先事項を記している。この場合のかぎの意味は自分一人ではなく役所において一定の職員において共有されている語句を表している。

何らかの「対応」を行ったという「誠意」を見せることで、「解決」へのハードルを下げられる場合が多い。(二六⑯—⑰)

ここでの主人公の対応は、自身の考えや感情からとった行動ではなく、役所の仕事上での「市民対応マニュアル」に則って行った行動に過ぎない。

職員に共有されている面から言えば「類型化された言葉(意味することが限定的な言葉)」になるのは当然のことであるし、自分の考えや感情がこもっていない言葉(事務的な言葉)になることも当然のことである。

『教師用指導書』のいう「強調」する効果については違和感がある。文脈の中でかぎを施すことによって、語句を「強調」する効果のことを述べているのだろう。単に、「市民対応マニュアル」の語句を引用しただけでも考えることができる。

人物

「私」の主な登場人物は、主人公、エピソードⅠに登場する「若い女性」、エピソードⅡに登場する「女性司書」の三名である。それだけの人物について、その特徴を明らかにしていく。

a 主人公

主人公は市役所に勤めており、「模範」とされる市民対応で、五

年連続で庁内表彰」(二五⑤)されるほど優秀な公務員である。表彰を受けるのだから「市民対応」には自信を持っている。「何十万人もの市民」とあるから、数十万人の人口の都市の職員であることがわかる。

主人公の公務員としての有能さは、冒頭部分からもうかがえる。

十二時五十五分、午後からの業務の五分前には、必ず机に着くことにしている。私はいつもどおり、午後から処理すべき案件をメモ帳に書き出し、それぞれの処理に必要な時間と、優先順位とを頭の中で組み立てる。(二四①—③)

「五時半に庁舎を出て」(二二②)というから、定時で退舎し、図書館で本を借りて帰宅するという知的な生活を送っていることを思わせる。

市役所では、市民対応の最先端である窓口を担当し、エピソードⅠでは未納者宛ての督促状の問い合わせに対応する仕事を担当している。

性別については、エピソードⅠでの山中とのやりとりでの言葉遣いから男性であると思われる。しかし、女性がそのような言葉遣いをしていないとも言えない。三崎亜記が男であるとか、窓口に立つのは女性である場合が多いとかいった先入観が読みに影響を与える可能性がある。いずれにせよ、一読した際に読み手に男女について意識させないものとなっている。

また、主人公はマニアルを重視する人物である。

市民対応マニアルに追加し、課題を解決策とを課内で共有化しなければならぬ。(三一①—②)

マニアルに従って行動し、対応することを重要視している。事務的である。

主人公がそういう人物であるからこそ、男性らしさ女性らしさを感じさせないのである。

b 若い女性

エピソードⅠに登場する「若い女性」の人物像に関する記述は非常に少ない。情報が少ないことが、読み手に不思議な印象を与えている。

「若い女性」はホンモノと「ビー」を見分けることができる。

督促状に印字された名前に、彼女は敵意のこもった視線を落とす。(中略)

「字面が一緒というだけで、ここに記されているのは『私』の名前ではないんです……。(二八⑬—⑮)

なぜ、見分けられるのか明らかにされていない。一般的にはあり得ない能力を有している。語り手である主人公がマニアルにない想定外の対応をしたために相手をよく見なかったのか、「若い女性」の人物の情報が少なくなっている。そのことも相まってミステリアスな印象を与えるのだ。

c 女性司書

主人公の対応を事務的にとらえるならば、エピソードⅡに登場する「女性司書」のそれは機械的であるととらえられるだろう。

主人公に対し「無感動な表情」(三二⑩・三四⑤)で対応する「女性司書」には感情のかけらすら本文中から見つけられない。主人公からの言葉に対し「間髪を容れずに」(三三⑮)答えたり、「よくある

ことばかりに「よどみな」(三三⑥)く答えたりしている。そこには謝罪の言葉も気持ちも全く感じさせない。「女性司書」に対し主人公は次のように考えるのであった。

立場こそ違え、彼女も「市民サービス」の向上を目ざすべき立場のはずだ。「模範」とされる市民対応「からはほど遠いと言わざるをえない。」(三三⑭—⑮)

主人公のモノサシからいえば、「女性司書」の対応は許せないものだったのである。「女性司書」は機械的どころか、ロボットの言つても過言ではないだろう。「間髪を容れずに」対応したり「よどみな」く回答したりする「女性司書」の様子は人工知能(AI)を彷彿させるものである。

デイスコミニケーション

エピソードIIにおいて、主人公と「女性司書」の会話に違和感がある。以下の部分は読み手も混乱する部分である。(傍線は稿者が施した。特に断りがない場合、以下同様。)

「それでは、二重になっているようですね。」

司書の女性は、間髪容れずに答える。それで私も、ようやく納得できた。

「ああ、貸出データが二重になっているんですね。それでは、そのデータを正して、貸出ができるようにしてもらえますか。」

無感動な表情が私に向けられる。

「いえ、二重になっているのは、データではなく、あなた自身で

す。」

「どういうことでですか？」

「貸出データによると、あなたは一週間前に三冊借りて、一昨日も三冊借りられています。一昨日に借りられた記憶がないということでしたら、あなた自身が二重になって借りられたものと思われます。」

よくあることだとばかりに、彼女の説明はよどみなかつた。「なるほど……。」

私はようやく合点がいった。入力ミスで個人情報データが二重になることがあるのだ。逆に、「私」の存在そのものが二重になることもあるだろう。もう一人の「私」が、一昨日図書館で三冊の本を借りたにちがいない。

「一昨日、本を借りられたのも、今日借りられるのも、同じあなたですから、十冊という制限を超えて貸し出すことができませぬよ。」

まるで私が無理な要求をしているとでもいうように、彼女はすげなかつた。
(三三⑭—三三⑮)

読み手は「二重」の意味について混乱を生じる。

主人公は「貸出データが二重になっている」と二つの同様のデータが存在すると考えている。一方で「女性司書」は主人公に対し「自身が二重になって借り」たと回答する。

「女性司書」の回答に「なるほど……。」と主人公は納得する。ここでの三点リーダーをどう解釈するだろうか。言いよどみだろうか、単なる間だろうか。主人公自身が本件に対して困惑している状況、理解していない状況を示すものであると考える。

主人公は「ようやく合点がいった。」としている。しかし、主人公の論理に読み手は混乱する。本文では、「入力ミスで個人情報データ

が二重になること」と「私」の存在そのものが二重になること」について同様の現象であるにとらえている。人間の側から見れば「入力ミス」であり、データの側に立てば主人公が「二重になつて借りた」ことは表面的には事実となる。読み手は人間側に立ち、「女性司書」はデータ側に立つ。コミュニケーションは成立しないのだ。

同様にエピソードⅠにおいてもコミュニケーションは成立していない。

「若い女性」は「経験していない人には、わからないでしょうね。」(二八⑬)とこれまで何度も理解してもらえなかったことを主人公に語る。「若い女性」は理解してもらえないからこそ「電話ではなく来庁」(二四⑦)する。自分を証明するために本来いずれか一つで間に合うものを、免許証と保険証とパスポート(二五⑰)を持参する。ホンモノとコピーを見分ける能力について、主人公も読み手も理解できない。

そういう意味で、「私」という作品は、エピソードⅠ、エピソードⅡを通じて、デイスコミュニケーションの物語とも言えるであろう。

読み手の立場から言えば、エピソードⅠの意味内容は理解しやすいが、エピソードⅡは理解し難い。この作品に不思議なイメージ、難解な印象を与えている。

II SHUNDO

二つのエピソードについて、「市民対応」、「ホンモノとコピー」の二つの視座から比較、検討する。

a 市民対応

主人公「私」と「女性司書」の「市民対応」について、教師用指導書では次のように記されている。

・「私」は相手にどのように思われるかを意識して対応しているが、「司書」にはそれが見当たらない。

・「私」の対応は、(これまでの経験から導き出されたものであり、)実際に問題が解決されるかどうかは重視されず、相手が満足するかどうかが重視されている。

・「司書」は、問題解決に直接的に関係することのみを行う(話す)。

主人公、「女性司書」ともに市民に対して、マニュアルで対応している。相手意識、「模範」とされる市民対応の点で対比されて描かれている。主人公が人間対応であるのに対し、「女性司書」はデータ対応である。

エピソードⅠにおいて、「若い女性」がデータの誤りを指摘した際、主人公は次のように考えている。

相手のタイプを推し量る。「無理難題タイプ」か「論理矛盾タイプ」であると推察された。(二六⑱―⑰)

しかし、エピソードⅡにおいて、主人公が誤りを指摘する際には次のように考えている。

「無理難題タイプ」でも、「論理矛盾タイプ」でもなく、「正当な主張」をする利用者であることを彼女に理解させるために、貸出を強要した。(三四①―②)

主人公は「若い女性」の要求を無理なものにとらえ、自分自身の要求を「正当な主張」ととらえている。(二二)で確認したいことは「若い

女性」も「女性司書」も自分自身では「正当な主張」をしているという認識を持つているということだ。

b ホンモノとコピー

「教師用指導書では、情報が二重になっていることに対する『若い女性』、『女性司書』、主人公のとらえ方の違いについて考察し、この作品が問いかけていることとして次のように記している。

○「女性」

・情報としては全く同じものが二重になっているとしても、片方のみが本物であると捉えている。

（二つとも「私」のデータだが、片方が「本当の私」であり、もう片方は違う。）

（情報の真偽は、本人によって弁別可能である。）

○「司書」

・情報データは二重になるものではなく、個人が二重になる可能性があるものとして捉えている。データに誤りはない（二重になっているのは、情報データではなく、あなた自身である。）

○「私」

・情報データが二重になることはありうるが、その場合、任意の片方を消去すればよいと捉えている。

（どちらの情報も本物であり、情報の真偽は個人にも第三者にも弁別不可能である。）

三者の「ホンモノとコピー」とらえ方の違いを整理すると次の通りとなる。

- 若い女性 ホンモノ ≠ コピー
- 女性司書 両者ともホンモノ
- 主人公 ホンモノ = コピー

「若い女性」はホンモノとコピーを弁別しているのに対し、主人公も「女性司書」もホンモノの意識が薄い。主人公はホンモノとコピーが存在することは認識しているもののコピーでもホンモノを代替できるものであると考えている。一方、「女性司書」はデータは全てホンモノであり、データを絶対的に信頼している。

矛盾

主人公は、データと個人の関係について、エピソードIでは次のように考えている。

それにしても、住民情報データと個人が、これほど密接に結びついているとは、思ってもみなかった。考えてみれば、私が「私」であるということを経済できるのは、こうして役所にデータがあるからこそだ。もしかしら、それら全てのデータがなくなってしまうたら、「私」という存在そのものも消えてしまうのではないだろうか？ (二二③—⑥)

しかし、エピソードIIでは、一部のデータが削除されることについて、次のように考えている。

すぐにしかるべき部署が、どちらかを、「削除」するだろう。どちらが消えようが、同じ「私」なのだ。何の問題もない。

この矛盾について、教師用指導書には次のように記されている。

作中の私は、「データがなくなってしまうたら、『私』という存在そのものが消えてしまうのではないだろうか？」といった想像ができる人間でありながら、なぜ「どちらも消えようが、同じ『私』なのだ。何の問題もない。」と言えるのだろうか。データが消されることによつて社会的な存在が消される「私」は、一昨日図書館で三冊の本を借りた「もう一人の『私』ではないかもしれないのである。そちらが残され、語っている私のほうのデータが消えてしまう可能性もあるのだ。図書館側としては、それでも問題はないだろう。しかし、私にとっては問題はないのだろうか。

データが「二重」になるということは、データとして失念される可能性も考えられる。誤りによつてデータを消失する可能性もあるのだ。

三崎は、この作品を書くきっかけ、思いを次のようにエッセイに綴つてくる。

私が「私」であることは、自分自身にとつては不動の真実なのに、それを他人に証明することはなんと難しいのだろうか。そんなエピソードが、「私」という作品を書くきっかけになった。

(中略)

もう一つ、この作品から考えてほしいのは、我々は、自覚していないが、いまが、誰もが「システムの中に組み込まれている」ということである。

今、政府によつてマイナンバー制度が導入されようとしている。国民全てに固有のナンバーを振つて、行政の効率化や利便性の向上を図ろうというものだ。個人の情報がデータとして一元管理されることは、便利になる反面、システムが何かの原因で動かなくなれば、すべてが麻痺してしまうという危険性も秘めている。

データとしての「私」のほうに信頼され、私かどんなに自分を「私」だと主張しても、周囲がそれを認めてくれない時が来るのではないか。そんな近未来SF映画のような恐怖も感じってしまう。ネット上の「なりすまし」の被害の例をあげるまでもなく、この作品の中のような本末転倒した状況は、すでに社会に現実として現れてきている。

「私」に関する知識は、自分にとつてはなんでもないものでも、他人からすれば「情報」であり、悪用もできるものである。「私」を管理されざるを得ない現状を自覚したうえで、利便性に踊らされず、危険に足をすくわれることなく、歩いていってほしいものだ。

この作品が発表されたのは、平成二十三年(二〇一一)十二月である。この年の三月、未曾有の大災害・東日本大震災が日本を襲う。津波により尊い命とともに、役場から自治体の庁舎が壊滅・損壊、住民データ等が消失するなどの被害が発生し、業務執行に困難を来したケースが発生している。そういう意味でもデータは危うい存在なのである。

データを管理するのはあくまでも人間であり、誤りがあるのは当然のことである。一方で、人為的にデータを削除、操作できるという事実を考えた場合、悪用される場合もあるだろう。全面的に信頼するのは恐ろしいことである。

SFやAIの「私」

ホンモノとコピーを弁別できる「若い女性」も、AIのような「女性司書」も、この世には存在し得ない。ホンモノ志向の「若い女性」とデータ志向の「女性司書」は、ある意味ではデフォルメされ設定されている。言い換えれば、「若い女性」は人間の能力を超えた神的存在であり、「女性司書」は感情を有しないロボットの存在である。そういう意味では、この二人は対をなしているともいえよう。

この作品をSFとしてとらえた場合、この世に存在しうるのは主人公のみである。データに対する考え方、物事の解決の仕方、ホンモノとコピーの考え方、現代社会に生きる私たちの傾向を主人公は担っているのである。

注

- 1 本稿はテキストとして『伝え合う言葉 中学国語3』（教育出版 平成二十八年（二〇一六））を用いる。引用の際、【 】内に算用数字は頁、○数字は行を示す。
- 2 『Jik Who's Who』（小学館）平成十八年（二〇〇六）三月配信 URL: <http://japanknowledge.com/psnl/display/?id=501200000001360>
- 3 『小説すばる』（集英社 平成二十三年（二〇一一））十二月一六二頁）
- 4 日本文藝家協会編『短篇ベストコレクション 現代の小説2012』（徳間書店 平成二十四年（二〇一二）六月 六三二頁）
- 5 教育出版編集局編『伝え合う言葉 中学国語3 教師用指

導書 教材研究編 上』（教育出版 平成二十八年（二〇一六）九〇―九一頁）

6 注5 『教師用指導書』 九三頁

7 注5 『教師用指導書』 一〇四頁

8 注5 『教師用指導書』 一〇五頁

9 注5 『教師用指導書』 一〇八頁

10 三崎亜記「私が「私」であること」（『道標』第三十一号 教育出版 平成二十七年（二〇一五）九月 二頁）

※ 本稿は、JSPS科研費（16K04666）による成果の一部である。

（さのひろみ／北海道教育大学釧路校教授）